がよいでしょう。つまり16世紀の始めには、識字教育がちょうど発達してきたおかげで、人口のおよそ10%の人々が読むことができるようになっているということです。この10%の人々は他の人々に力を貸してやることができます。そのおかげで、人々はたとえ文盲であっても、印刷されたテキストの内容に接することができるようになります。このようなわけで印刷本は人口のかなりの部分に影響を及ぼすことができるのです。

宗教改革はまさにこのようなコンテキストの中で生じました。宗教改革は意識的かつ徹底的な仕方で印刷本という手段を用いることを選びました。マルティン・ルターは、1517年から1520年の間に、自らの立場を知らしめるために史上初の“プレス・キャンペーン”を張った人です。フランス語圏ではさらに一世代遅れて、1540年から1560年の間にジュネーヴの印刷業者たちが毎年数十種類にのぼる本を世に送り出しました。それらは、特にフランスに向けられた、プロテスタントの教えを宣伝するための作品でした。聖書や詩篇、カルヴァンの著作など数万冊にのぼる本がフランス王国に向けて輸出され、改革派教会の拡大を支えたのです。クレマン・マロ[3]とテオドール・ド・ベーズ[4]による『詩篇』のフランス語訳だけをとってみても、1562年の一年だけで3万冊もの本が生産されたのであり、それはこの時代としては全く驚くべき数字だったのです。この数字がどれほど莫大なものであったかということを正しく判断するためには、16世紀には一冊の本の印刷部数は通常800から1000部程度のものだったということを知っていなければなりません。それゆえ次のように言ってもよいでしょう。つまりフランス市場は宗教改革の息吹を伝える印刷本によって大々的に席巻されてしまったのだと。この現象はカルヴァンの意志から生じたものですが、明らかに知識人以外の階層においても本が読まれていたということを前提としています。そしてこの同じ現象は間違いなくフランスにおける読書［習慣］の普及をますます加速させたものだったのです。

宗教の領域におけるフランス語について、カルヴァンが見出した状況はどのようなものだったのでしょうか。聖職者たちの学問的な宗教文化はラテン語で表現されていたので、フランス語は、宗教の領域においては、平信徒でも接することのできる信心や敬虔さを表すためにしか用いられていませんでした。つまり祈り、宗教詩集、瞑想のための作品に用いられていたのです。それらはどれも学問的であろうとはしないものです。［そのような作品の中で］最も有名なものは『キリストにならいて』です。この作品の原文はラテン語ですが、当時ヨーロッパのあらゆる日常語に翻訳されたのです。日常語で表現されたこのような宗教作品は、読者が知的に反省するためのものではなく、何より彼らの想像力や感受性に向けられたものでした。というのもこれらの作品は大学で学んだことのない読者（特に女性たち）をその対象とするものだからです。このような作品の文学上のスタイル［文体］は中世末期の建築物のスタイルに、つまりゴチック様式と言われるものに、しかも「装飾的ゴチック様式」という後期の形式に対応しています。それらは装飾が非常に豊かなのですが、それは視線（想像力）を釘付けにして、見物人（読者）の心に感動を与えるためのものであって、抽象的で厳密な仕方で推論させるためのものではないのです。簡単にまとめましょう。次のように言うことができます。一方にはラテン語で表現された、学者や聖職者（こういう人たちはすべて男性です）の高度な［教養］文化が存在しています。それは学問的知識とその諸々の観念の

3) クレマン・マロ（Clément Marot）（1496－1544）：フランスの詩人。1518年王姉マルグリット・ド・ナヴァールの家中にとりたてられ、宮廷詩人として出発。福音主義に共鳴した。1542年末、弾圧を避け、ジュネーヴへ亡命し、同地でカルヴァンの要請に応え、フランス語訳『韻律詩篇歌』の作成に従事、刊行（1543年）、1543年にジュネーヴを逃亡した。

4) テオドール・ド・ベーズ（Théodore de Bèze）（1519－1605）：フランスの人文学者、宗教改革者。1549年ローザンヌのギリシア語教授となり、ジュネーヴに移り、1559年カルヴァンが大学（ジュネーヴ・アカデミー）を創設したとき、その初代学長となった。カルヴァン没後、改革派を代表する神学者、教会政治家として、全ヨーロッパ、特にフランスの改革派教会を指導し、宗教改革の権利を擁護した。文人としてはフランス語文法を整え、カルヴァンの要請に応え、『詩篇』全150篇の韻文訳を完成した。聖書学者としてはギリシア語写本の研究を開拓、聖書の翻訳、注解をして、カルヴァンの神学を継承し、普及した。